

人の心に寄り添う医療人になる

第5回 伝統と革新を生きる・1

歌舞伎役者，俳優
市川染五郎（いちかわそめごろう）
×
昭和医療技術専門学校学校長
山藤　賢（さんどう まさる）（インタビュアー）


（撮影：野村佐紀子）

市川染五郎（いちかわ　そめごろう）氏 プロフィール
本名，藤間照薫（ふじま　てるまさ）．歌舞伎役者，俳優．屋号は高麗屋．日本舞踊松本流の家元で，舞踏家名は松本錦升（まつもと　きんしょう）．1973年1月，9代目松本幸四郎の長男として，東京都に生まれる．1978年10月，NHK大河ドラマ「黄金の日日」に子役で出演．1979年3月，歌舞伎座「侠客春雨傘」で3代目松本金太郎を襲名して初舞台．1981年10月，歌舞伎座「仮名手本忠臣蔵」7段目の大星力弥，他で7代目市川染五郎を襲名．2014年11月，初世松本白鸚三十三回忌追善興行「吉例顔見世大歌舞伎」において，高麗屋のお家芸である「勧進帳」で，初めて弁慶役を勤めた．インタビュアーの山藤賢先生とは私立暁星学園にて小学校から高校まで同級生．

編集室注：染五郎さんと山藤先生は小学校から高校までの同級生です．山藤先生は染五郎さんのことを，昔からのとおり，名字で藤間と呼んでいます．対談の冒頭のみ，そのままの表記とさせていただきました．

山藤（さんどう）：藤間，今日は公演後で忙しいところをありがとう．これ，好物をお土産で持ってきました．

染五郎：おー，麻布十番の浪花屋のタイ焼きじゃない．小さな頃からの大好物です．取りあえず，一緒に食べよう．

《そして，タイ焼きを食べながら，二人で，小学校時代のアルバムを見る》

山藤：おー，この写真，小学生のとき，クラスが違う藤間とはリレーで対決したよね．藤間は足が速くて身体能力は高かったよなぁ…．

染五郎：山藤はサッカー部で花形だったしね…．

山藤：うーん，懐かしいね～（笑）

それでは，対談を始めましょうか．これからは，雑誌掲載用に言葉使いも少し改まってまいりましょう（笑）．対談中は，あえて染五郎と呼ばせていただきます．よろしくお願いします．

編集室：それでは，よろしくお願いします．

人間「市川染五郎」と娯楽「歌舞伎」

山藤：まずは，染五郎自身のことと歌舞伎のことについて聞きたいと思います．今日のお芝居（「通し狂言　東海道四谷怪談」）の冒頭もそうだったんだけど，市川染五郎は，実は世間が

〔本連載の形式〕各界で著名な先生方への山藤先生のインタビュー（対談）にて，組織で働くこと，チーム内でのコミュニケーション，教育，臨床検査技師としての知識・技術の継承と向上，患者さんの心・命，自分の人生の役割などについてお話いただきます．対談のなかで，山藤先生が感じた医療とのつながりの部分を，心の「共振」ポイントとして解説を加えていただきます．

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2016

0301-2611/16/紙：¥500/電子：¥750/論文/JCOPY

2024/03/29 07:55:41

思っている以上に，なかなかひょうきんだよね（笑）

染五郎：そうかな（笑）

山藤：妖艶というか，色気のある演技ももち味だけど，実は，陽気で，何かコミカルで観客を巻き込む感じをわざとすることがあるよね．

染五郎：できる，できないは別にして，そういうの，好きは好きだね．今回のお芝居も，もともとあるものをちょっと変えた部分があるんだけど，そうやって自分が作るときには，笑える部分というか，遊びの部分を入れているよ．

山藤：それは，昔から？　根がそうなの？

染五郎：お芝居はしょせんウソ，フィクションだから，それこそ教育的なお芝居になるだけじゃつまらないし，説教的な芝居になっても面白くないし，笑って楽しく，というのがお芝居を作るときの根底にはあるんだよね．なかには，悲劇もあったり，社会性があるものもあるけど，でもまぁお芝居だから，安心してもらう，また自分も安心する部分は必ず欲しくなるね．

山藤：僕は，この前，人工知能の専門家の話を聞いていて，「最後，ロボットにはできなくて人間に残されるものは何かといったら，ユーモアだろう」と言っていたのが面白いなと思ってね．僕も，自分の医療法人（医療法人社団昭和育英会）の全体会議などでいつも職員に，「医療や教育は，確かに真剣に命がけで取り組むものだし，ハードワークしてほしいけど，やはり人生って楽しむものかなと思うと，何かを真剣にやっていても，遊び心みたいなものがいつもあるといいな」と言っています．年を重ねたからこういうことを思うようになったのかもしれないけど，そういう要素はある気がする．

染五郎：あるんだね．歌舞伎によって何かを支援するとか，「直接的」に人類のためにできることは全くないかなとは思うんだけど（笑），でも人間にとって，娯楽というのは必要なものじゃないかと思うね．それが，ユーモアという言葉になるのかなぁ？　切り捨てていけば切り捨てられてしまう世界だけど，でも，こういう娯楽の部分があってこそとか，それを楽しむ余裕があってこそ，人間らしく生きていけるんじゃないか，という気はするね．



対談前にタイ焼きを食べながら談笑する山藤先生（左）と染五郎さん（右）
染五郎さんはこの日，「通し狂言　東海道四谷怪談」に出演し，お岩，小平，与茂七，大星由良之助，鶴屋南北の５役を務めた．

山藤：なるほど．歌舞伎的に見ると，「娯楽」という表現がいいの？

染五郎：うん，そうだね．歌舞伎は松竹㈱という民間会社が興行を打っているから，商売になっているんだよね．もちろん，国に支援はしてもらっているけど，商売になっている伝統芸能は世界的にも珍しいらしいので，それなら，単なる伝統芸能紹介者ではなくて，見て格好いいとか，すごいとか，面白いとか，泣けるとかいうお芝居をやり続けないといけないなと僕は思っているんだよね．伝統芸能でありながら，今いる人たちをどれだけ呼べるかというところに立っているので，本当に大娯楽だと思うよ．

山藤：大娯楽．う〜ん，いいなぁ．その役割を担っているんだね．僕が，染五郎の芝居を初

2024/03/29 07:55:41

めて見たのは，ハムレットだったね．稽古がある染五郎と，学校から都営三田線千石駅まで一緒に帰っていたことがあって，三百人劇場(所在地は文京区本駒込，2006年に閉館)に芝居を見に行ったよね．あれは，いつだっけ？

染五郎：14歳だったから，中3だね．

山藤：僕は初めて観て，“同級生で舞台に立っている人がいる，すごいなぁ”と思って．僕は恥ずかしくなるくらい，全然文化的な人間ではないし，あれから随分たつけど，大人になってまた染五郎の歌舞伎を観てみたら，いろいろ勉強になるし，刺激を受けるので，継続して観ているんだよ．本質的に歌舞伎をわかっているわけではないけど，観るたびに，やはり面白いなぁと思うし，すごく刺激を受けています．

「仕事」ということの本質と「使命感」

山藤：この雑誌は若い読者も多いのですが，何か参考になるかと思いますので，染五郎にとっての仕事とは，あるいは働くということをどう考えているかを聞かせてもらいたいです．

染五郎：歌舞伎は，“今週頑張って週末ゴルフしよう”というような週休2日の一般的な仕事ではないから，答えるのは難しいです．僕らは毎日舞台に立つ．だから，いわゆる仕事とプライベートの境目も，あってないようなもので，“大変だけど今月なんとかやって，今日の講演が終わったら，何か面白い芝居がないか探しに行こう”とか，仕事をしながら他の仕事で気分転換している感じです．もちろん，芝居を観に行くのでも，映画を見るのでも，音楽を聴くのでも，全部芝居にはつながるので，そう考えると，これ(歌舞伎役者)を仕事としてやっていけることは，本当に楽しいね．

山藤：なるほどね．「楽しい」ってすてきだね．ただほら，普通のサラリーマンなら，「今日，頭痛いから休みます」とか，「体調悪いから休みます」とか言えるけど，染五郎には許されないじゃない？　コンディションに関係なく，一定のものを与え続けるというか，表現し続けるというのを，僕は，言葉としては“使命感”だと感じるところがあるんだけど，どうですか？

染五郎：それはあるでしょう．今頑張らないと，歌舞伎自体は，もうなくなっちゃうかもしれないという危機感もあるし．6歳からずっと歌舞伎をやってきて，もちろん襲名するということもあるけど，目に見えて何かが変わるわけではないでしょ？　10代，20代の頃は初めてやることも多いので，「一生懸命頑張っていきます」というようなことを言っていたけど，今は，たぶん言っちゃいけないよね(笑)．今はもう安定して，お客さんに納得していただくものをやっていかなければいけない立場だと思うので，そういう意味では，使命感っていうのを感じます．

そして，時々，「公演をひと月やっているけど，同じことをひと月やってて飽きないの？」と言われることもあるけど，これは飽きないね．これもう，亡くなった立川談志師匠(落語家)の受け売りで，師匠に，「舞台に，何で毎日立つかわかるか？」と言われたことがあって，「う〜ん，好きだから？」とか答えるわけだけど，あの談志師匠が，「不安になるからなんだよ」って．「今日，この座に上がってウケるだろ？　ウケるけど，“明日ウケないかもしれない”とか，“明日はダメかも，どうかなぁ”っていうことを思うんで，だからこそ明日も立つんだ」って言うんだよ．

山藤：なるほどねぇ．

2024/03/29 07:55:41

染五郎：「“もうできました．完璧だった”と思っちゃったら，そう思った瞬間に，舞台立つ意味ないんで，辞めるわ」って．“これで完璧にできた”と，満足しないということなんだろうね．でも，師匠が“不安だから上がるんだ”と思っているんだって聞いて，ちょっとびっくりしたなぁ．

でも確かに，“今日はまぁできたけど，もっと何かやること，やり残していることがあるんだ”って思わないと続かないよね．ましてや，同じ芝居を毎日．“全然反応がなかったらどうしよう，ちょっとこれ，上がるしかない”ということで，上がる．こういうことがエネルギーになったりするから，飽きるなんてことはないんだろうね．

山藤：そうなんだ．朝，“今日，上がるの嫌だなぁ”と怖かったり，寝るとき，“明日怖いなぁ”ってことはないの？

染五郎：それは，もうしょっちゅう(笑)．舞台に立っているとき以外は全部と言ってもいいくらいで．舞台に立っているときにはもう「今日はこれしかできません」っていうことでやるけど，もう終わったら，「はぁ」っていう反省ばかりだよ(笑)

山藤：もうこれで完璧とか，毎日同じことをやっているだけだから大丈夫とかでは決してないんだね．僕はそこに，染五郎の使命感とかすごみを感じました．どこの業界も似たことはあると思うんだけど，医療の世界でも，毎日同じ仕事をやることをルーチンワークといったりします．これは臨床検査技師向けの雑誌の連載なので，例えば、病院で毎日の採血作業をする，それを機械にかける，ということがそのようなルーチンワークだとします．「仕事は毎日ルーチンワークだから，自分はやる気を出さなくても変わらずできる」とか「単調でつまらない，飽きてしまう」って言う人がいると聞いたことがあります．でも，先ほどの「毎日，同じことをやっていて飽きない？」っていう人の質問は臨床検査技師にもあてはまって，毎日がルーチンワークだという臨床検査技師も，毎日が違う人，違う検体を相手にしているんだと，また，そこに完璧がなくて，まだまだ自分にやれることがあると思っていると，毎日がチャレンジだし，毎日が進歩だし，見方が変わるんじゃないかと思ったんだ．

染五郎：なるほどね．でも，医療は大変な仕事ですよ．人の命にかかわる現実だからね．歌舞伎だったら，亡くなった人も，薬や何かで「よみがえったぁ！」ってできちゃう(笑)．けど，医療とは，数字やデータで白か黒かわかってしまうことだし，常に現実に直面しているわけだよねぇ？　やはり尊敬しますよ．

山藤：うん，ありがとう．それはそうだし，だからこそ医療人たちは責任ある誇りある仕事だと思うけど，僕からしたら，あの歌舞伎の舞台にいて，何万人も見ているなかで失敗することのほうが怖いよ．

染五郎：あはは(笑)，うん，僕も怖いよ．

山藤：歌舞伎の舞台に立つって，すごいね．映画やドラマとかと違い，舞台なので，今のなしねって，やり直しが利くことではないからね．あ〜，でも，それくらい真剣になっているってことだからこそ，本当にルーチンワークじゃないんだよね．検体を扱うとか，人を扱うという仕事も，同じことなどない，毎日それくらい真剣に考えてやらなきゃいけないってことだよね．1対1でそれだから，1対何百，何千，何万ってやっている染五郎は，やはりすごいなぁ．

2024/03/29 07:55:41

共振のポイント

染五郎の話を聞いて，ディズニーリゾートのスタッフから聞いた（注：山藤先生が学校長を務める昭和医療技術専門学校では，学生・職員が一緒にディズニーでの研修を受けている），「毎日が初演である」という言葉を思い出しました．例えば，ディズニーの入口で入場客をチェックしているスタッフは，たくさん人がくるし，毎日同じようなチェック作業だけど，お客さんにとっては初めてくる一度限りのディズニーかもしれない．だから毎日が初演であるつもりで臨むという姿勢です．これは，ディズニーでは，ショーをやったり，食事を提供したり，掃除をしたり，いろいろな役割があるスタッフ全てがもつべきフィロソフィーであるといいます．「自分にとっての大勢のお客さま」ではなく，一人一人のお客さまの立場に立つということですね．

われわれ医療人も同じで，「毎日同じ検査」ではありません．その患者さん一人一人の命であり，同じ患者さんでも，「同じ日」，「同じ瞬間」はありません．だからこそ，その一瞬一瞬，毎日，毎回を真剣勝負として捉え，その毎日にチャレンジ，成長，進歩があるべきかなと思います．染五郎の思いからは，そのような決意を感じましたし，生きるジャンルは違えども，あらためてその姿勢に心が共振するところ，気付かされるところがありました．　（山藤）

「いのち」について思うこと

山藤：話は変わりますが，「イマ」の染五郎を語るうえで，欠かせない大きな出来事があったと思います．せっかくの対談の機会なので聞きたいのですが，答えたくないことは答えなくていいので…．

染五郎：何でも聞いてくれて大丈夫ですよ．

山藤：3年前，生死にかかわるような舞台からの転落事故がありました（注：染五郎さんは，東京・国立劇場で2012年8月27日，公演中に舞台セリから3m下の奈落に転落し，意識不明となった）．この雑誌は医療系の雑誌ということもあるので，そのあたりの「いのち」についての考えや思うことを教えてもらえますか．

染五郎：ああいうことがあって，「何が変わりましたか？」と一番よく聞かれるんだけど，毎回，「何も変わっていないです」って答えるんです．というのは，“自分でも実感できるほど，あれで何かが変わった”とわかるんであれば，乱暴な言い方にはなるけど，“皆，頭ぶつければいいんじゃない？　でも，そんなもんじゃないでしょ？”と思うからです．

あれは本当にミスで，起きてはいけないことだったんですけど，そういうことが起きてしまったこと，そして，また舞台にも立てるようになったことには，何か意味があるんじゃないかなぁとは思っています．いつか，5年後か10年後かわからないけど，“あれって，ああ，だからああいうことを，自分は経験させられたんだ”と思うときがくるかもしれないし，ずっと

2024/03/29 07:55:41

こないかもしれない．それをあえて今は，“どういう意味があったんだろうな”ということを，まとめないようにしようと思っています．

僕は，「あっ」と思った瞬間から何日間かは全く覚えていないから，いわゆる恐怖を味わっていないんです．だから，また舞台に立てたんじゃないかと思っているんです．覚えていたら怖くて立てない．あのときは，頭を打って，手術をするかしないかで随分判断が難しい状態だったと聞きました．

頭を開けると(手術をすると)，命が助かる可能性はぐっと上がるけど，障害が残ったり，起き上がれなくなるかもしれない．でも，開けずにいくと，完全に治る可能性がある．ただ，助かる可能性は低くなると．周りの人は，開けないということを，「こうなっているのに手術もしないの？　ってことはダメだってことなの？」と思ったみたいで．周りの人はどれだけハラハラしたかと思うんだけど，本当に，奇跡的に全部がいい方向にいったんですよ．全身，何本も骨は折れていたけど，それが臓器に全く刺さらなかったっていうことも，おかしな話だって，先生は言ってましたね(笑)．骨は再生するけど，神経や腱はダメですよね？　僕の場合は，骨は何カ所も折れていたけど，神経や腱には損傷はなかった．それらを一つ一つ聞いていると，不思議なことばかりで．

でも，あの事故でいったん止まったということでもあったので，“こんなことが起きてしまって，またやるべきなのか，やっていいものなのか，また舞台に立つことが許されるべきなのか”ということは，あのときはずっと考えていましたね．

1週間寝ているだけでも歩けなくなるじゃない？　それでまず歩く練習，“歩くって大変だなぁ”ってところから始まって，“次はつかまらずに歩いていって，その次は，病院の外を歩いてみましょうか”というように，少しずつリハビリを進めていったんだよ．“あ〜，こういうことになるのか”と思って，びっくりしたよ．

山藤：そうかぁ．“それでもやはりやらなきゃ”って思う原動力はあったの？

染五郎：また，歌舞伎をできる身体にしていただいたということも含めて，またできるようになったのであれば，やるべきものなのではないかなぁ，って思ったんだよね．

山藤：染五郎は正直だなぁ，って思うね．でも，記者の人はかわいそうだよね．「何かそれに意味あったんですか？」って質問して，「いや，ありません．わかりません」って2行くらいで終わっちゃうもんね(笑)

染五郎：(笑)．いや，何かしら記者は聞きたいところだろうし，僕もそう聞かれることで考えて，でもこれは早急に結論を出すことじゃないんだなと思ってそう答えてきたんです．

人の心に寄り添う歌舞伎とは

山藤：では話を少し変えまして，これは「人の心に寄り添う医療人になる」という連載のなかのインタビューなんだけど，僕らは普段，人と向き合って，“この人に寄り添おう”と思うと，その人の話を聞いて，その人の望んでいることをやろうとする．でも，何を望んでいるのかわからない人たちを相手に，染五郎は舞台を通して，何かを表現をして，共感を得るわけじゃない？　僕は，これが，染五郎にとって，“人の心に寄り添っている”ことなんじゃないかな，と思うのね．

僕は歌舞伎を観ていて，心が共振する，心が震える感じがある．染五郎が初めて弁慶を演じ

2024/03/29 07:55:41

た(注：「勧進帳」は染五郎さんの屋号である高麗屋のお家芸で，弁慶役は，染五郎さんの小さい頃からの憧れだった)ときの歌舞伎座でも，例えば最後に見えを切るときにも，涙が出ちゃうような，こう，ぶるぶる震えるような感じがしたのね．それは，人が“見たい”と思うものを見たというか，共感している，共振しているってことじゃないのかなぁ？

染五郎：う〜ん，なるほど，そうだねぇ．芝居とは白黒ないものなので，同じ芝居を同じ日に見て，「もう，めちゃくちゃ面白かった」という人もいれば，「めちゃくちゃつまらなかった」という人もいて，どちらも正しいんだよね．

山藤：僕も，同じものを見て，全員が同じように納得することはないと思っているから，よくわかるよ．

染五郎：でもそうやって，何か目には見えないものだけど，受け止めてくれると感じることができるのは，うれしいことだよね．

山藤：そのときには，人とつながっている感覚はあるの？

染五郎：そういうこと，感じたことあるのかないのか，という感じだけど，でもこう，客席が迫ってくるように感じるときもあったり，逆に，自分が全部支配しているように思うときもあったり，全部が敵だと思うときもある．でも，実際には，そんなことはないんだよね．自分のそのときの気持ちで，感じるものは違うよね．

山藤：そうだね．先ほどの“人の心に寄り添う”ということでは，僕は，しっかり自分をもっていないと人の心に寄り添えない，芝居でいえば共感を得られないと思うんだけど，染五郎は，演技でこびようとは思わないでしょ？

染五郎：これはもう，難しいところだね．自分がやりたいことをやるということも必要なんだけど，お客さんに共感してもらったり，何かを感じてもらえて初めて成立するものなんで．だから，客席にどんどん下りていけばいいということではなくて，こっちも引っ張るし，客席からも引っ張られるし，お互いに引っ張り合うし，という綱引きみたいなものだなぁ，と思ったときはあったね．

山藤：なるほどね．今，一番近い感覚がそうなの？

染五郎：そう思っていたんだけど，今は少し違ってきている．お客さんに伝えることではあるんだけど，今はたぶん，どこかに向かっているんじゃないかと思っている．オヤジ(松本幸四郎さん)を見ていると，あれだけの芸とキャリアがあるのに，一つの芝居をもう，ぜいぜいしてやるわけだよ．あの歳になって何で，そんな大汗をかいて，ぜいぜい言いながらやっているんだろうな，と思うときがあって．お客さんにわかってもらおうじゃなくて，オヤジは，どこかを見てやっているんじゃないかなぁと，最近感じているんだよね．それは，自分の親なのか，憧れの役者なのか，職業的には…神なのか…(笑)わからないけど，何かに向かってやっているんじゃない？

山藤：あ〜，そういう領域に入ってきたんだね．

染五郎：お客さんはどういうものに興味があるだろうとか，どうしたら反応してもらえるんだろうということばかり考えていると，擦り切れるよね．で，もちろん，結局自分は何なんだということになっていくから，それこそ，ブレていくよね．毎日，違うお客さんに対応するということじゃなくて，台本がある芝居だから，“これは絶対にいい，ここに向かってやるんだ”というものを信じて作っていき，見てもらうと

2024/03/29 07:55:41

いうことだろうね.

山藤：いいねぇ！　それが何かは，言葉にはできない？

染五郎：できないねぇ.

山藤：オヤジさんは，そういうの，言葉で何かもっているのかなぁ？(笑)

染五郎：まぁ，オヤジは，何かいい言葉言うと思うよ(笑)

山藤：いやぁ，すごい興味ある面白い話です．この前，お父さん(松本幸四郎さん)の弁慶も観たけど，染五郎の弁慶のときとはまた違った心の振るえ方をしたんだよ.

“あれだけの人を感動させるって，親子でどちらもすごいなぁ，その心のうちを聞きたいなぁ”と思っていたから，今の話はとても勉強になりました．染五郎は，ちょっと前までは，綱引きだったんだよね？　不安とやりたいことのバランスは，僕自身，まだはっきりとはわからないけど，年齢や経験でいろんなものを越えていったら，何かに向かっていきたいなぁ．僕も，何かっていうのがわからないけど(笑)．でも「何か」っていうのがいいね！　感覚としては，すごくよくわかります.

いや，今何を思ったかというと，何をもって歌舞伎役者なのかなぁと思ったんだよね．例えば医療人は，何をもって医療人という存在なのかなぁと思ったときに，歌舞伎役者とは，染五郎にとって，どういうものなのかなぁと思って.

染五郎：歌舞伎役者…，う〜ん，どういうものっていう答えにならないかもしれないけど，“自分は歌舞伎をやるために生まれてきたんだということだけは，信じていたい”という思いはあります．それはもう不安だし，“もう無理じゃないか”と思ったり，“無理なら何でやっているんだ，辞めればいいじゃん”と思ったりしたこともあるし．でも歌舞伎のことが好きだし，やりたいから，“歌舞伎をやるために生まれてきたから，やらせておいてくれ”という感じだね(笑)

山藤：それ，役割みたいな感じ？

染五郎：いや〜，役割があるにせよ，ないにせよ，歌舞伎役者にさせておいてよ，という感じ(笑)

山藤：格好いいね．そうかぁ．それが染五郎の人生の役割なのかもしれないね．実は僕らもそういうものをもっていて，環境とかではなく，今やっていること，それ自体が天からのギフトであり，それに邁進しなければならないのかもしれないよね．やりたくないとか，役割かもしれないとか，もうそんなことではなく，「これしかないんだから，やらせてくれ！」これはすごくいいですね．今あるもの，または神とか何かの存在に対する感謝の気持ちですね.

(次号に続く)

山藤　賢(さんどう　まさる)氏 プロフィール

1972年東京都生まれ．昭和大学医学部，同大学院医学研究科外科系整形外科学修了．医学博士．小学校から高校までは私立暁星学園サッカー部で活躍．東京都大会で優勝した他，全国大会にも出場した．現在は臨床検査技師教育に特化している昭和医療技術専門学校の学校長として学生の育成にかかわる傍ら，現役の臨床医として患者とも向き合う．医療法人社団昭和育英会理事長，横浜つづきメディカルグループ代表として医療機関を複数経営．日本臨床検査学教育協議会においては，副理事長を務め，2014年には学会長の任も務めた．また，なでしこジャパンのチームドクター(オリンピック，ワールドカップなど帯同)，東京都サッカー協会医事委員長(現)を務めるなど，スポーツドクターとしても活躍している．また，2013年の著書「社会人になるということ」(幻冬舎 刊)は，丸善日本橋本店にて，週間ランキング1位(ビジネス部門)になるなど，その活躍は，医療界にとどまらず，広いフィールドで注目されている.

本連載に関するご質問・感想などは，編集室(e-mail：kensa@igaku-shoin.co.jp)までお寄せください.

2024/03/29 07:55:41